

平成22年6月28日現在

| |
|---|
| 研究種目：若手研究 (B) |
| 研究期間：2007～2009 |
| 課題番号：19720028 |
| 研究課題名 (和文) 「伊年」印草花図を中心とする宗達派草花図の研究－北陸と京都での 需要をめぐって |
| 研究課題名 (英文) Research on Sotatsu School's flower-grass-paintings with focus on those with 'Inen' seal - Rising demand in the Kyoto and Hokuriku regions |
| 研究代表者 岡田 梓 (OKADA AZUSA) 日本女子大学・人間社会学部・助手 研究者番号：60440088 |

研究成果の概要 (和文)：

北陸地方での分布から需要を探ることで、「伊年」印草花図の大量生産の根拠や用途、さらに宗達の工房の動向を知る手掛かりを得ることを目的とした。北陸での需要の背景として「嫁入り道具」説が広範にわたって定着しているが、この説を導き出す歴史資料は見出されず、「伊年」印草花図の発掘と研究に先鞭を着けたと言える。1975年の石川県美術館の展示解説の影響が強い。また、俵屋宗達の交友関係や出自の問題、宗達の後継者の一人である俵屋宗雪の制作活動などから、宗達派は京都と北陸のほか、大坂・堺を重要視して今後の研究を展開すべきである。

研究成果の概要 (英文)：

By exploring the demand arising from the Hokuriku area, this study examines the foundations and use of mass-produced flower-grass-paintings with 'Inen' seal and any clues these may have about trends in the studio of Tawaraya Sotatsu.

The general explanation behind the demand from Hokuriku is as dowry, but because there are no forthcoming historical sources to establish this, this hypothesis was strongly influenced by the commentary of the 1975 Ishikawa Prefectural Museum exhibition, which is said to have pioneered the discovery and research of flower-grass-paintings with 'Inen' seal.

Further research should focus on questions of Sotatsu's relationships with friends, his birth and the importance placed by the Sotatsu School, outside of Kyoto and Hokuriku, on Sakai, Osaka, due to production activities by his only successor Tawaraya Sogetsu.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 600,000 | 0 | 600,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1600,000 | 300,000 | 1,900,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史

1. 研究開始当初の背景

とくに琳派の絵画で大きな部分を占め、代名詞にさえなるほどの画題である草花は、宗達、光琳に築かれたように考えられがちだが果たしてそうだろうか。宗達没後、光琳が画家として脚光を浴びるようになるまでおよそ半世紀の時を要する。宗達が描いた草花と光琳の草花とは隔たりもある。それは単に光琳の個性や創案によるものと言い切れるだろうか。光琳の洗練された草花図の成功には、宗達と光琳の狭間で草花に執拗な制作活動を見せた画家たちの働きを無視することはできない。宗達没後、光琳の活躍までの間をつなぐように活動した宗達率いる工房と宗達の後継者として法橋位にも就いた二人の画家による草花図に注目する。

琳派の草花図は、従来の文学や吉祥に裏付けられた植物表現とは異なる表現として「草花図」を確立した。同時代の画壇の典型的花鳥画における草花表現からの脱却を試みた人こそ俵屋宗達である。しかし、屏風絵や襖絵など大画面における草花表現の確立という点では、宗達の後継者や弟子などの周辺の絵師たちの草花図への並々ならない執着が果たした役割は大きい。彼らが多く制作し今日に伝わる「伊年」朱文円印（署名が無く、印章のみ押されるものが大量に残されている他、宗達の署名のあるものや宗雪や相説といった弟子の署名を伴うものもあることから、宗達工房の商標的役割を持ち、弟子に受け継がれたものと考えられている）を捺す草花図は、構図、表現技法、草花の種類や組み合わせなどのあらゆる点で、従来にない斬新な試みがなされている。このいわゆる「伊年」印草花図を大画面における草花図の変革の原動として見直す。「伊年」印草花図における変革は、自己完結的なものではなく、その後にも大きく影響するものであり、先学に導かれながら検証解明を試みてきた。

一般に「伊年」印草花図と呼ばれる「伊年」朱文円印が捺された草花図については、すでに多くの研究者たちによって多角的に研究され、その研究量は他の日本美術の研究に比べても決して少なくない。しかし、作品の量が膨大であるのに、それらはほとんど署名を伴わないため、これらの作品の筆者や制作順序の整理を難しくし、作風や完成度にも幅があることから位置づけや評価が定まらず、宗達派草花図の中ではいまだ陰の存在である。

これら署名の無い「伊年」印草花図は、優品として注目を集め論じられるいくつかの個性的な作品を除き、構図や描かれる植物に

おいて大変似通っているものが多数存在する。

現在、作者についてはわずかな史料と作品の落款から、俵屋宗雪と喜多川相説の二人の名前と制作活動が知られるのみである。宗雪は、署名のある作品が極端に少なく、少ない史料（『扶桑名公画譜』『隔莫記』『永代法式』『燕台風雅』など）によってその業績を知るのみである。これに対し相説は作品に署名が確認されるが、史料はほとんど無いという有様である。微々たる手がかりからわかることは、おおよそ以下のとおりである。

- ・ 宗雪は寛永 19 年（1642）には法橋位にあり、当時、後水尾院に絵が献上される関係にあったこと。
- ・ 宗雪は寛永 20 年（1643）頃には加賀前田藩に出仕していたらしいこと。
- ・ 相説は、宗雪の弟子あるいは子、もしくはは弟という大変近い存在であること。

ここで最も注目すべきは 3 代藩主前田利常統治下の加賀藩前田家に宗雪が出仕していたことである。需要の問題としては大きく、後水尾天皇周辺と前田利常周辺とに二分することができる。とくに後者に注目する理由は、宗雪が出仕していたという事実だけでなく、宗達派の草花図が最高部の支配者層に限らず広く需要される理由として「婚礼」という事象が聴こえるためである。現存する「伊年」印草花図を概観しても質はさまざまであり、数は膨大である。何かの事情が作用して需要が高まったと考えられるのである。

前田利常の娘富姫は、寛永 19 年（1642）に後水尾院の従兄弟である八条宮智忠に嫁いだ。その新居の襖絵の制作に「俵屋」が狩野探幽とともに携わっていること、それらが贅沢なものでその代金が高いことが『今枝民部書留帖』の寛永十九年六月二十九日の条、同年七月に十九日の条、および同年十月二日の条から読み取れることから、この時、前田藩との関係が希薄でないこと、宗達派が絵師集団として一定の評価がされていたことは想像に難くない。それを裏付ける史料が、『微妙公御夜話』拾纂名言記の寛永 18 年（1641）八月晦日の条の「酒井讃岐守殿牛込の下屋敷にて踊を献ぜらるゝ事あり。（中略）道中の装束不残拝領仕、遣ひ扇子迄被下、金地に俵屋の絵を被仰付、二本充被下」という記事である。遅くともこの時には、俵屋と前田家とは取引があったのである。現状では、それらが草花図であったかどうか、知る手立てが無い。一方、『三壺聞書』の慶安 3 年（1650）の記事には「飛驒守利治公は、春に至りて利

常公御相伴にて、酒井讃岐殿其の外御振舞可被成と思召し、御書院御次の間を正・二月に至りて作らせ給ふ。御道具は五・七年以前より舩屋治左衛門異国の物を取り替へ引きかへ御覧に入れ調上ぐる。御座敷印子の金具、家のほりもの、探幽・俵屋が書きあらはす唐絵・草花の絵様、金銀をのべ敷、誠に前代あるべき事共不覚」とあり、明かに草花の絵を手がけたとの記述がある。

利治公とは、利常の三男で大聖寺藩の初代藩主となった前田利治(1618~60)のことである。父の利常とともに江戸の屋敷で酒井讃岐守らを饗応するため、書院と次の間を増築した際、俵屋が探幽と共に座敷の絵を描いたとある。「探幽・俵屋が書きあらはす唐絵・草花の絵様」というのは、探幽が唐絵を描き、俵屋が草花を描いたと解してよいだろう。しかもそれは「金銀をのべ敷、誠に前代あるべき事共不覚」とあり、金(銀)地著色の草花図であり、従来のもとは違っていたことがわかる。

そして、前田家伝来とされる宗達派の草花図も存在する。「開館記念展 日本美の心 花鳥風月展—古典と現代—図録」(石川県立美術館 1983年)90頁の「六 罌粟図屏風 伊年印 江戸 八曲1隻」の解説文によると、現存する宗達派芥子図のほとんどが前田家関係個所からのものであるという。さらに、『ボストン美術館東洋美術名品展』(東京国立博物館 1972年)の解説文によれば、同館所蔵の「芥子図屏風」(6曲1双・無款記・宗達派)は、一隻の裏面に貼り付けられた書付により、天徳院にあったもので前田家により寄進されたものであることがわかるという。

また、石川県美術館が1975年に開催した「宗雪・相説展」の図録、前出の「花鳥風月展」の図録の解説文および、石川県立美術館館長の島崎丞氏による「金沢地方における宗達派と宗雪・相説について」(『琳派絵画全集 宗達派二』日本経済新聞社 1978年)の冒頭において、宗達派の草花図の用途について触れている。これによれば宗達派の草花図は、ある程度の財力を持つ家々の嫁入り道具としてステイタスシンボルとなり大切に受け継がれ、今日(これらの文章が書かれた当時)まで、金沢市および石川県下に相当数伝存されていると言う。これが証明できれば、宗達工房作の草花図の用途が判明し、同図様の「伊年」印草花図の大量生産の需要の謎を解く糸口になるのではないかと考える。

2. 研究の目的

宗達派の絵の需要が加賀藩3代藩主前田利

常の周辺にあったことに立ち戻って、その関係から宗達派の草花図の需要と流行について再考したい。現在、「伊年」印草花図は既知のものだけでも散在している。しかし、北陸地方に多く潜在していると言われ、現在、石川県立美術館にも数点の「伊年」印草花図があり、これまでの調査からも金沢を中心として独特の需要があったと予測できる。北陸地方での分布から需要を探ることで、「伊年」印草花図の大量生産の根拠や用途、さらには制作年代までを検証することができる。

「伊年」印草花図の存在意義を裏付けることにより、宗達の工房の動向を知る一助となるばかりか、18世紀以後他派でも草花のみで画面を構成する「草花図屏風」は盛んに制作され、近世絵画の一角に地歩を固めるまでに高まった「草花図」の関心と制作の高まりを論じる上でも非常に有益である。

3. 研究の方法

北陸に伝存している伊年印草花図作品の情報を収集すべく、博物館での実見調査および所蔵館の学芸員からの聞き取り調査を行った。また、伊年印草花図が北陸に多く伝存している理由として、嫁入り道具として用いられたことを挙げているため、それが史実であるのか、前田家姫君を中心に、婚礼に関する史料を金沢市立玉川図書館および近世資料館や石川県立図書館、国立国会図書館にて調査するとともに、加賀藩前田家所縁の地域(主に金沢市およびその周辺地域)に関する史料を調査した。

また、工房の動向を探るべく、2008年には石川県金沢市の承証寺にて、同寺が蔵する「菘に兔図」板戸の熟覧および写真撮影を行なった。

同時に、京都での工房の活動も報告されていることから、手がかりを得るべく、京都府立総合資料館、京都市歴史資料館で資料収集を行なった。

宗達および宗達の後継者の作品は、後水尾天皇の許にも届いていたことが史料から知られており、またこの当時、後水尾天皇が「立花」に執心していたことは有名である。後水尾天皇を中心とする寛永時代の文化サロンの中心への影響関係という観点からも立花と宗達派草花図との関係を見逃すことはできない。関心の推移や採用される植物の種類などについて比較検討する余地があると考え、2009年3月には京都の六角堂近くの池坊いけばな資料館にて資料閲覧するなど資料収集に努めた。

さらに、俵屋宗達の墓碑と言われる金沢市の宝円寺と京都市の頂妙寺の二か所にある墓

碑についての研究を再検討した。先達の研究を手掛かりにこの二つの墓碑の資料性を確認し、さらにほかの史料や作品の注文者、賛を寄せた人物などとの関係から、宗達とその工房とそこで中心的な存在として活躍し、法橋位に叙され宗達の後継者として名を連ねた俵屋宗雪と喜多川相説の制作活動をたどった。宗達とその工房に制作を依頼した人物からも二つの地域との密接な関係が示されており、これらを再検証することは宗達とその工房の動向を明らかにするために非常に重要であり、必要不可欠な研究である。

また、京都の墓碑からの宗達と西陣との関係を調査するべく、京都府立総合資料館などでも資料調査を行うほか、旧蔵者をたどることで作品の来歴を知るべく昭和初期以前の書籍や売立目録などを収集した。

4. 研究成果

一つ一つの疑問点に向き合い、確認していくという地道な作業の積み重ねであった。残念ながら今回の研究期間内に新資料の発見や大きな展開には至らなかったものの、これまで実しやかに述べられてきたことを検証し、より客観的に史実を確認するなかで課題を明らかにすることができた。まずは北陸地方での宗達派作品の分布についてである。

石川県立美術館では、俵屋宗雪筆「萩に兎図屏風」、伊年印「四季草花図屏風」、喜多川相説筆「草花図屏風」、喜多川相説「秋草図屏風」の計4点を調査した。これらの作品の出所を所蔵館の学芸員にインタビューしたところ、業者から購入するなど、ほとんど前の所有者の情報にたどり着くことができないなかで、わずかに俵屋宗雪筆「萩に兎図屏風」だけは、金沢市内で寛永の頃より菓子店を営む旧家から寄贈されたものであることがわかった。宗達の襖絵として伝来していたと言うが、実際には宗雪の署名とともに「伊年」印が押されており、この旧家にどのような経緯で伝わったのか、また建物から取り外されて蔵に入れてあった状態で、邸宅内でかつてどのように扱われていたのかは伝わっておらず不明である。

富山県内にも伊年印草花図が分布しており、黒部市美術館では伊年印「四季草花図屏風」、喜多川相説筆「四季草花図屏風」の2点を熟覧・調査した。所蔵館に聞き取り調査をしたところ、後者は地元の旧家が旧蔵者であることがわかったが、かつての扱われ方や経緯については、寄贈時には既に曖昧なものになっていたという。以上の作品調査については、「中間報告 北陸地方における宗達は草

花図調査について」(『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第15号、251-241・280-261頁、2009年)で資料の細部紹介を兼ねて報告した。ここでも、金沢周辺地域からの嫁入りがあった際に持ち込まれたのではないかと、との推測が聞かれた。このように北陸での需要の背景として「嫁入り道具」説が広範にわたって定着していることがわかった。

ところがいずれの場合も、その根拠となる一次史料については明白でなく、見出すこともできないことから、それにはやはり、「伊年」印草花図の発掘と研究に先鞭を着けたと言える1975年の石川県美術館の展示解説の影響があると考えられる。この展覧会は俵屋宗雪と喜多川相説の二人に初めて光を当て、その周辺にある無款の「伊年」印草花図の類例の膨大さを知らしめ、改めて「伊年」印の問題も大きな課題として研究者に投げかけた。その一方で需要のすなわち政策背景の問題は取り残されて石川県立美術館になった後も、作品の解説にはしばしば「ステイタスシンボル」「嫁入り道具」としての需要が説かれており、北陸の類例の成立根拠として広く定着したものと考えられ、若干一人歩きした感を否めない。

強いて言えば、元和6年(1620)の東福門院入内の際に30双もの屏風が嫁入り道具として持ち込まれたことはとくに有名であるが、その他の近世の史料でも嫁入り道具として「屏風」が挙げられているので、「伊年」印草花図屏風もこれに含まれると考え、また、利常の娘富姫が寛永19年(1642)に八条宮智忠に嫁ぐ際に、新居の襖絵制作に「俵屋」が携わったことから、北陸での宗達派のステイタス性の向上と婚礼との関係性を指摘できる。また、日本女子大学人間社会学部文化学科での研究プロジェクト「ジェンダー」での2006年11月に行った口頭発表「江戸時代の豪華な婚礼—「伊年」印草花図研究の端緒として—」(於・日本女子大学人間社会学部文化学科映像資料室)においては、大名家の婚礼に倣って武家から町衆にまで指南書を通じて婚礼が様式化し画一化することと膨大な類似作品を生み出した「伊年」印草花図の成立の背景との関連も指摘した。しかしながら、先の展覧会の解説の根拠となった証言・文献等の探索に研究期間の多くを割いたにもかかわらず、ついに発見には至ることができなかった。この説の根拠の再評価を本研究課題の根幹に関わる部分としてとらえていたため、非常に遺憾であり、今後も追求する。

2008年には石川県金沢市の承証寺にて、同寺が蔵する「萩に兎図」板戸の熟覧および

写真撮影を行なった。この作品は、落款印章は無いが、かつての調査により宗達派の作品として紹介され、以来、幾度となく宗達派の作品として紹介されてきた。金沢市内に伝存し、かつ使用方法、使用環境が明らかな作例として調査を行なったものである。本研究課題で対象とする作品群は草花図であり、本来追究する作品とは逸するが、この作品には萩だけでなく、いくつかの秋草が描かれており、筆致などを他の草花図作例と比較することができた。北陸地方に伝存する宗達派の作品には亜流と見られる作品も含まれていることが指摘できる。これには、必ずしも偽作と不問に付すべきでない派生的な要素が見られ、なお詳細な検討を要する。

問題点は現在の所蔵者以前の流通経路が明らかでない作品がほとんどであること。現在、博物館で所蔵している作品にも所縁の作例として購入されたものもあり、旧蔵地が北陸であったかが不明である。明治・大正期の出版物および売立目録などから旧蔵者を特定することができる作品は極一部に過ぎず、それらも制作当時まで遡ることは困難である。なお、明治・大正そして第二次世界大戦終戦までの売立目録や出版物の記載から知り得る所蔵者も、北陸との関係を特段に強調するものではない。

次に北陸と京都の二つの地域での宗達派の活動を人的交流と作品分布から検証することは本研究課題の主題の一つである。

金沢・宝円寺と京都・頂妙寺にある宗達のものとの伝承がある二つの墓碑は、宗達の活動拠点を示す根拠の一つとして、発見・発表当初から議論を呼んだ。伝記史料が乏しく、出自不詳の宗達について知ることができる貴重なものであるとして注目された一方で、宗達との関係を決定的なものとする根拠となる史料に欠け、美術史においては一定程度の距離がとられてきたが、これらの墓碑は北陸と京都の二つの地域を結び付ける象徴的遺物として注目した（「宗達とその後継者たちの足跡—京都と金沢を基点として—」、『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第16号、367-347頁、2010年）。とくに頂妙寺は宗達の「牛図」を所蔵しており、墓碑は西陣の機屋である俵屋喜多川家のもので、喜多川家の元祖は蓮池宗利（俗名・蓮池平衛門秀明）であり、頂妙寺の寺地（高倉中御門の旧敷地）を寄進した人物である。『雍州府志』には「俵屋野々村氏」とある一方で『扶桑名公画譜』には宗達は「喜多川氏」とされており、後継者とされる相説も喜多川姓であることなど関係性が色濃い。

さらに日蓮宗の寺である頂妙寺は、天文の法難の際には天文5年(1536)から7年の間、大坂・堺に避難している。頂妙寺の第三祖・日珙上人(1532~98)は父である堺の豪商・油屋伊達常言が伽藍を寄進した三好長慶の父・三好之康の菩提寺である妙国寺(堺市)を開山した。

一方、堺の豪商・谷正安の発願で沢庵宗彭和尚によって開山された祥雲寺(堺市)に宗達筆「松島図屏風」(フリア美術館蔵)が伝蔵していたことや養寿寺には戦災で焼失したが宗雪筆の杉戸絵があったことなどからも、宗雪と相説による「伊年」印の草花図の制作背景やその需要を考える時、必ずしも金沢に特化せずにより広く北陸地方に主眼を置きつつ、同時に草花図以外のテーマの作品を含めて、より俯瞰的な視点で宗達の後継者として、或は俵屋の工房として見つめた場合、京都との関係を考える際にはとくに大坂・堺との関係を複眼的に見据える必要があると考える。

状況証拠が宗達派の活動範囲の広がりや物語る。根気よく一次史料の搜索を継続し、また同時代の有力な町衆や公家、武士など文化の担い手たちの動向や世相等の関係に十分に配慮して研究する必要がある。さらに、作品の来歴を遡ることが難しい現状にあっては、いまだに遅れている宗雪や相説の作品研究を進め、作品の傾向や特徴からも周辺他派の作品や画家との関係を検討し、作品自体の再評価を行ってきたい。

宗達の工房に関する研究は状況証拠、二次的史料による推論に頼らざるを得ない状況にあり、裏付けとなる具体的かつ活動期から遠くない歴史史料の発見を渴望して搜索すると同時に、個々の作品研究を並行して行っていく計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 岡田 梓、宗達とその後継者たちの足跡—京都と金沢を基点として—、日本女子大学大学院人間社会研究科紀要、査読有、第16号、367-347、2010
- ② 岡田 梓、中間報告 北陸地方における宗達は草花図調査について、日本女子大学大学院人間社会研究科紀要、査読有、第15号、251-241・280-261、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 梓 (OKADA AZUSA)

日本女子大学・人間社会学部・助手
研究者番号：60440088

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし